

原爆投下前後の賀茂高等女学校

昭和 20 年 8 月 6 日、原爆投下された当時、県立賀茂高等女学校の状態は次のようであった。4 年生は、広海軍空廠に学徒勤労報国隊として、既に動員されていなかった。3 年生は、学校のほんの一部を残して全体を、広島陸軍被服廠の学校工場となっていて、彼女らはミシン工として、白鉢巻きも凛々しく軍服縫製のミシンを、学校中唸る騒音の中に踏んでいた。

2 年生は、8 月に入ってからだったと思う。4 キロ離れた賀茂郡郷田村東子（現在の東広島市西条町東子）の呉海軍工廠の火工部疎開工場に勤労働員され、自宅から工場に通勤し始めていた。

1 年生だけは、僅かに残された校舎の片隅で、曲がりなりにも授業を続けていた。1 年生の授業と言っても、既に出征中の教師がいて欠員し、広空廠に宿泊して生徒の付き添え教師として出向中もあり、留守番役の僅かな人数の教師が、各自の専門教科の都合で、片寄った授業であったに違いない。それで私も 1 年生の授業をしつつも、教科の都合上交代して 2 年生のいる東子工場にも出向いた。

私は運命の日、8 月 6 日原爆投下の一瞬は、教科上誰かと交代して、東子工場に向いていた時だったと思う。若い将校の短い朝礼の言葉が終わろうとした瞬間、8 時 15 分、西方にピカッと閃光を感じた。

しばらくしてドーンと大音響が伝わり、驚いて見上げた広島上空と思しき空に、果てしなく上へ上へと入道雲のような大きな雲が昇って行くのを見た。誰かが「広島市のガスタンクに爆弾が落ちて、ガス爆発したんだ」と叫んだ。みんな異口同音の面持ちで見守っていた。いったん上がったキノコ雲は、一日中消えなかったような気がする。まるで悪魔が立ち上がって威嚇するかに見えて不気味だった。

この東子工場は爆弾を作る火工部の工場で、最近疎開工場として具から移されたらしい。今から建物建築が始まろうという感じであった。彼女らの仕事は、呉から輸送され山積みされた古い建築資材の中から、一本ずつ抜いてきては、それに数人集まって釘を抜く作業である。釘を再生して使うということらしい。釘抜き用具が少ないので、小石で叩いて抜くのが大変である。釘が抜けたら小石の上で小石で叩いて真っすぐに伸ばし、カチカチと朝から終わる時間まで、「もう何本になった」と笑い声を上げながら、箱の中に直立不動の釘を揃えていった。彼女らは、真夏の暑い直射の露天で、麦藁帽をうつむけて、汗をタラタラと草の上に落としながら続けた。まだ見えているキノコ雲の下で、どんな地獄絵図が開かれているかは思いもしなかった。彼女らは、釘のばしに失敗して手を叩いて「痛い」と僅かに声を上げたりした。私は翌日、1年生の授業に学校に帰った。

ここで私は、多くの広島の情報を知った。西条駅に下車する人たち、裸同然の焼け

ただれた被災者の群れ、通過する車窓にも異様な裸身の焦げた姿、広島市は火の海だということだった。その情報はどれを聞いても見たことも聞いたこともない驚天動地のものであった。

8月6日のピカドンは、日本国民、広島市民の上に、凶らずもまた、やがて広島市に入る私たち救援隊のかつての女学生にとっても、碑のように彫り付けられた運命の日であった。この日から私たちは世の終わる日まで、恐ろしい悪魔の振り上げた鋭い爪の振り下ろされるのを、怯えながら待たなければならないことになるのである。

8月6日の朝、学校工場のミシン工であった3年生の上田茂子さんは、広島市大手町の叔母さんが危篤だと言うので呼び寄せられ、西条駅から広島に出掛けたきり帰らなかった。やがて、学校工場に欠勤が続き、親たち近親者が広島に出掛けて探しているという知らせがあり、学校側も彼女の行方を交代で探しに広島市に出掛けることになった。8月15日、校長から命ぜられて、私も同伴の教師と彼女の心安かった生徒と、初めて壊滅した焼土と化した広島市に足を入れた。遺体が並んで倒れていて言語に絶する焼け跡を、本川小学校収容所、大手町を歩いて日赤病院と、一縷の望みを抱いて亡き人、負傷者の顔を探して歩いたが、見つからなかった。みんな絶望の中に帰校した。上田茂子さんは、その後も探されたが遂に帰らぬ人となったのである。賀茂高女生徒としては、予期せぬ唯一人の最初の原爆犠牲者となったのである。

吉田校長の子息も、広島一中に早朝出掛けたきり夕方になっても帰らなかった。校長の家族も探しに出掛けた。校長も、公私ともに心労が多かった。が、後日子息の方は似島収容所で発見されて、動けるので負うて連れ帰り、長く病院で苦しんだ。

西条周辺には、広島市へ通学通勤者も多く、6日早朝出掛けたきり帰らない人が多く、近親者の広島市の焼け跡の収容所探しも、疲労困憊の有り様であった。それらが後にどんな影響をもたらすかは、神ならぬ身は知る由もなかった。たまたま幸運と言ふべきか運よく逃れ帰った人も寝ついたきり頭が上がりなかった。こんなことで1年生の授業はそっちのけでリュックにモンペ姿で歩き回った。日本国民として、8月15日は忘れられない終戦の日だった。取り返しのつかない悲しさは永久に忘れられないであろう。39年経っても胸を突き上げてくる。

8月17日、いよいよ広島救援隊として出動の日である。まず学校長の下に15日広島県学事課から、至急広島救援の指示があったので、終戦と同時に動員を解かれて帰宅したであろう3、4年生（高学年）に、口から口の緊急連絡網で通達できた範囲内で、父兄の承諾書を取って、広島救援隊が編成された。

17日早朝から桧山博先生が団長となり、11名の教師は、当時の列車は復員で満員の状態なので、西条駅から時間差をつけて、個々の教師が残っては引率して乗車し、広島駅に着いたと思う。

私たちが女学生も麦藁帽にリュック姿で、70年草木も生えずと言われた、見渡す限り瓦礫の焼け跡を、カッと照らしつける真夏の太陽の下を黙々と徒歩で、長い列をなして歩いた。途中で立ち退き先の記された木札の立てられているのも見え、被爆者の誰かを待つ心の切なさが見えて哀れであった。

現在の日本勧業銀行ではないかと思う石造りの建物、その時は東警察へ到着して、私たちは数時間待たされた。誰も彼も動員中の疲れで居眠りをしていた。

やがて、本川小学校収容所、大河小学校収容所、段原山崎町第一高等小学校収容所、等へ配属が定まり、配分された人数の生徒を連れ、一人が或いは二人の女教師（宿泊のため女教師の引率となった）が、再び焼け跡を、命ぜられた収容所へ向かって歩いた。私は、彼女らと本川小学校へ向かった。かつて私も学生時代に4年間住んだ懐かしい城下町だったが、今見れば、国破れて山河あり、の感一人で、焼けた電車の残骸、むくろのように残った原爆ドームを見上げながら、人間は営み作ったかと思うと、あっけなく崩してしまったり、神を恐れぬ許せぬ業を平気で繰り返している。それに引き換え、広島の小川はどうかろう。あの日は、焼け焦げながら逃げ飛び込んだ人々で溢れたというのに、もう過去に押し流して、むしろ静かに光って流れている。この時の女学生も現在五十五、六歳になっているが、この時受けたショック、人間の空しさ、自然の悠久といったものが、何らかの人生観として生涯残されたと思う。

赤い瓦礫の下には、亡き人々が無数につぶされてあるようで、異臭と無数の畑である。相生橋の橋上で、馬の形にうずたかい白い蛆のとめどめもなく盛り上がるのを見た。無慚そのものであった。

爆心地に近い本川小学校収容所は、川べりの鉄筋の建物で、校舎のコンクリートの波形の床の上には、200人くらいと思われる負傷者が、並べられていた。一人一人が焼けただけ、ほとんど腐った痛々しい姿は、目を背けたい惨らしさで、赤チンを至るところに塗られて、目を見開いているようで動かない。ああ、目の回りも口の周囲も傷口も、盛り上がった蛆の行列だ。おびただしい蠟である。また異臭である。これでも人間と言えるか！ 万物の霊長なのか！ これが神の作った優れた知性を備えた人間の姿か！ と私は、悲しみと憤りに涙が噴き出て止まらなかった。奉安庫にも負傷者が数人寝かされていた。既成のモラルも何も次ぎから次へと壊されていったたまらない空しさであった。

老医師が一人私達を待っていた。米俵とバケツの前に人がいて、彼は、「8勺のおむすびを作って1個ずつ手に渡してくれるように」と告げると直ぐにいなくなった。老医師は早速生徒の半分を看護の方に連れて行った。

私はすぐに夕飯にかかった。生徒たちは、焼け跡から、高く噴水のように吹き出している水を受けて米を洗ったが、立つ足の下にも死体が見え隠れして埋まって、瓦礫

といっても腐敗した異臭と夥しい蠅群に、彼女らは声を上げていた。

大きな鉄釜が運動場に石塊を積んだ即製のカマドの上に載っていた。洗った米を入れたが、燃やす薪らしいものがない。生徒を連れて木片を探して焼け跡に帰ると、まさに奇跡のように、誰もいない空き地に薪が山と積まれて、〇〇配給所という立て札が見えた。人影一つない瓦礫の中にある。「この辺一带に、本川小学校収容所に人られた被爆者のお家があったのかも知れない、頂こう」と私たちは感謝し、威勢よく両手に一把ずつぶら下げて引き上げた。

火はドンドン燃えた。大こげを作ってしまった。上は粥状で下はおこげでベリベリといている。失敗だった。全部火を引いて、粥状の表面を棒でついて穴を開けて水の引くのを待った。どうやらふっくらとした。ところで8勺のおむすびである。これは大変だった。柔らかい少女の手は熱さに真っ赤になった。それでも一生懸命で、夢中になってこしらえた。大変な数である。バケツに入れて彼女らは一個ずつ手に載せて回ることにした。

家があれば筒に盛る飯を草枕

旅にしあれば椎の葉に盛る

という万葉集の歌が浮かぶが、椎の葉さえもない、ここでは手から手へである。蠅蛆のたかった手に載せて上げると、また蠅がたかって胡麻塩むすびになる。「早く食べて

下さいね。」と言っても返事もなく、生死の分からない状態の人が多いと報告を聞いた。次ぎの時、前にあげたおむすびが、蠅で真っ黒のまま手にのっかっていると言う。生徒たちは、悲しい思いに顔を伏せながら、配給して歩いた。

肉親縁者が捜し当てて、枕元に座って胡瓜の熟れたので、ただれた体中をその果汁で撫で回している女の人もあった。家庭療法らしい。愛情療法である。七輪を持参して炭火でお粥を作り、スプーンで食べさせている。母親らしい人もあった。私は生徒たちに、「ただ一人横たえられて目を開けている人には、特に注意して言われるように手伝って上げなさいね。」と頼んだ。

夕方になると、警官らしい人が生徒に手伝わせて、砂場に亡き人を運んでは油を注ぎ燃やしていた。人の最後に燃える火の弱々しさよ、このようにして人間の終末を遂げさせた戦争を、生徒と共に憎んだ。将来反戦運動の妻、母とならねばならない等を語り合った。

戦後、17、18年も経った頃、町の回覧板で原爆被爆者健康手帳の交付があることを知った。それによって定期的に健康診断をして頂けるということだ。ポツポツ市町村の厚生係の窓口をたたく人もあるようになり、私もその時の救援隊の出動したメンバーの要請によって、沢山の彼女らの証人となり、今も証明を続けている。

賀茂高女は、引き続いて賀茂高校になって、私は49年に退職するまで、いろいろ

な方法で当時の3、4年生に呼びかけて証明し続けた。

あの時の少女の中には、もう白血病で逝った人、ガンで逝った人がいる。引率教師の中にもある。血便に悩まされ、脱毛し、丸坊主になっていつも頭巾を被っていた人もある。五十五・六歳にもなれば、いろいろと思いがけない病気も出てくる。

めいめいが少女の日、垣間見た地獄絵図、あの原爆被爆者の実態に触れた哀しさを、人間がその惨事を戦争という名目で行った。ということに言い知れぬ憤りを抱いたことを、8月6日を迎えるたびに思い出すのである。そして私たちは、戦争反対平和を祈るのである。原爆症の怖ろしさを私たちは知った。

何の恐れもなくついて来て、人間愛に燃え献身的に働いてくれた彼女たちに、その時の引率者の一人だった私に出来ることは、あの時の賀茂高等女学校救援隊員として入市し、救援に従事していながら、いまだに被爆者健康手帳の申請を、日々の生活に埋没して受けていない人たちのために、一人の証明者として待っていることである。

昭和60(1985)年8月

高崎 スマ子 記